

地域の記憶の継承と地域アイデンティティのゆらぎ

―災害過程における地域生活のビジョンの破壊と再構築の試みをめぐって―

○早稲田大学 浦野正樹
早稲田大学 野坂真
早稲田大学 川副早央里

1. 問題意識とテーマの設定

本研究は、激甚災害に襲われた地方社会が経験する〈復旧・復興期〉に焦点をあてて、その地域住民らが社会諸課題に取り組むプロセスを、地域コミュニティ存続の源泉となり精神的な基盤ともなる〈地域の記憶継承〉や〈地域アイデンティティの再編成〉との関係で実証的に明らかにしようとするものであり、科研費プロジェクトによる昨年度の一連の日本社会学会報告「災害復興期における地域の記憶継承・アイデンティティの再編」の続編といえるものである。

地域社会の価値や存続意義は何かなどの問いかけを繰り返しながら、地域での継続的な生活を支える地域ビジョンや展望を創り出し共有していこうとする試みは、単に地域のもつ価値や理念の共有にとどまるのではなく、実践的な地域活動を通じて、地域の人間関係のネットワークの再編成や生き方の模索・再構築に繋がっていく。地域の記憶継承やアイデンティティの覚醒は、その試みのコアの部分に位置づけられよう。本研究では、地域社会の存続を基底から支える地域文化のこうした領域に目を向けることで、その動きが地域社会関係や地域生活を維持していくしくみの再構築の営為（試み）とどう関係し、どう影響しあっているかに着目していく。

2. 研究フレームと知見

本研究では、とくに東日本大震災の被災地域をとりあげて、地域文化に関わるこうした領域の問題が、地域活動における社会関係のネットワークの再編や地域でのさまざまな〈なりわい〉のスタイルの模索や雇用機会の創出等と繋がってくる位相を明らかにしようとするものである。現在、東日本大震災で被災した地方都市とその周縁にあたる地域圏では（とくに周縁部にあたる地域において）、地域での〈なりわい〉のスタイルが崩れて先の見通しが不透明な状態に陥っているところも多く、地域の存続の危機に瀕した状態が続いている。激甚災害が地方社会を襲ったとき、とくに過疎地域においては地域生活を続けていくための生活ビジョンや地域で生きることの矜持が突き崩され、それを取り戻し回復することが極めて困難だと地域住民自身らが感じる局面がある。地域で生活を継続していくためには、社会生活の基盤を再建し家計経済や生活資源の調達、ケアなどの扶助のしくみを再構築して地域での生活を成り立たせるとともに、中長期的には自然災害等への一定の安全・安心感を担保しながら地域社会が存続していける生活のしくみを編み出し社会関係を再構築していく必要がある。しかし現実の災害復旧・復興段階における地域社会過程では、これらが相互にアンビバレントな関係に陥ったり、行政の事業計画担当者と住民諸団体間、住民諸団体と住民間、住民相互間での展望の持ち方や意識のずれが顕在化し、復興事業が地域ニーズに合わなくなったり、各レベルでの利害対立が激化したり、意思疎通自体が難しくなって社会関係が崩れたりしていくことが往々にして起こっている。そうした社会過程のなかで、それと並行して地域の記憶やアイデンティティに関しても、上記のさまざまなレベル・角度からの諸力が働いており、自生的に見える地域の記憶継承や地域アイデンティティ再構築の動きもそうした力を敏感に受け止めながら推移しているのである。今回の報告では、他の災害事例も参照しながら、具体的な調査対象地域としては、地方都市圏内の中心部と周縁部の関係から生じている諸事象に影響を受けている岩手県大槌町に焦点を当て、地域の集合的記憶や地域アイデンティティに関わる動きを探っていきたい。